男たちの旅路

傑作選

山田太一

NHKテレビ・シナリオ

NHKテレビ・シナリオ

男たちの旅路 傑作選

山田太一

日本放送出版協会

著者紹介

昭和9年，東京浅草に生まれる。昭和33年早稲田大学卒業。松竹大船撮影所演出部を経て，現在シナリオライターを主業とする。作品に「パンとあこがれ」「獅子の時代」「それぞれの秋」「岸辺のアルバム」「あめりか物語」「想い出づくり」など。それらによって，芸術選奨新人賞，テレビ大賞，放送文化賞他を受賞。著書に「昼下りの悪魔」（エッセイ集）「終りに見た街」（小説）などがある。

NHKテレビ・シナリオ
男たちの旅路——傑作選
定価　一、四〇〇円
昭和五十七年十一月二十日　第一刷発行

著者　山田太一
発行者　藤根井和夫
発行所　日本放送出版協会
東京都渋谷区宇田川町四一一一
郵便番号　一五〇
振替　東京一—四九七〇一

装幀　蟹江征治　編集協力　青藍社
印刷所　近代美術／三陽社
製本所　田中製本
検印廃止
©1982 Taichi Yamada, Printed in Japan
ISBN 4-14-005108-6　C0093　¥1400E
（落丁本・乱丁本はお取り替えいたします）

男たちの旅路——傑作選

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

目次

非常階段　5
冬の樹　47
シルバー・シート　89
流氷　131
影の領域　171
車輪の一歩　215
対談：『男たちの旅路』を終えて　269

非常階段

スタッフ

音楽　ミッキー・吉野

美術　斎藤博己
技術　安藤和夫
中継　原満
効果　柏原宣一
擬闘　林邦史朗
制作　近藤晋
演出　中村克史

キャスト

吉岡晋太郎（50歳）　鶴田浩二
柴田竜夫（22歳）　森田健作
杉本陽平（22歳）　水谷豊
島津悦子（20歳）　桃井かおり
後藤良司（35歳）　前田吟
田中清（50歳）　金井大
沢新子（30歳）　木村有里
浜宮聖子（19歳）　五十嵐淳子
斉藤司令補（50歳）　中条静夫

ある高層ビルの階段・23階（夜）

普通エレヴェーターが使用されるので、階段は幅も狭く、非常階段の印象である。一人の若い娘が、疲れた無表情な顔でのぼって行く。階段の淋しい靴音。

あるグラウンド（昼）

十五人ほどの男たちが、思い思いの服装で（運動しやすいという工夫はそれぞれしている）グラウンドを走っている。その後ろを五人ばかりの娘たちが、同じくバラバラの服装で走っている。イチニ、イチニ、イチニ、イチニ。柴田竜夫、杉本陽平がいる。走る一団を三人の男女が見守っている。後藤良司士長、田中清士長補、沢新子先任長である。

いずれも警備士の服装である。

ある高層ビルの階段・36階（夜）

のぼって行く娘。のぼりつめたところにドアがあり、それを開ける。

ある高層ビルの屋上

風が強い。娘、出て来て、立つ。背後でドアが自然に閉まる。

あるグラウンド（昼）

トラックを走る男女。男の一団が後藤の前を走る。沢、一歩前に出て手をあげ、

沢「（やって来る女性五人に向かい）女性はここまで、男性は、あと二周して下さいッ！」

陽平「ホイハイホイハイ（と顎を出しながらもおどけて返事をしつつ走る）」

竜夫「――（走っている）」

ある高層ビルの屋上（夜）

娘、柵をのりこえて、後ろ手に柵につかまり下を見る。

街の灯がはるか下の方に見える。目を閉じ、パッと手をはなして飛び降りる。悲鳴。

タイトル

「男たちの旅路」
グラウンドを走る男たち。
第一話「非常階段」

スタッフ
キャスト

あるグラウンド（昼）

後藤の周囲へ次々と着いて、ハアハアと息をする男たち。
沢と女性五人はいない。

後藤「いきなりご苦労さまでしたが、ガードマン即ち警備士になろうとするものは、最低このくらいの運動には耐えられる体力を持っていなければなりません。自信のない人は申し出て下さい」

ある高層ビルの屋上（夕方）

大きな夕陽。
守衛の老人、一方を見てハッとし、「待ちなさいッ！　そのまま、そのまま」とひきつった顔で怒鳴る。夕陽の逆光を浴びて、黒々とした若い男のシルエットが柵をまたぎかけている。

守衛「よしなさい。早まっちゃいかん。そのまま（と慎重に近づいて行く）」

若い男（決心したように柵の外へ出る）

守衛「（立ち上がり）そのままッ！（走る）」

若い男（泣き声のような声をあげ、飛び降りている）

守衛「（柵にとびついて）なんまんだぶ、なんまんだぶ（と顔を歪め、うめくように言って足がなえる）」

体育館（昼）

沢「（ピーッと笛を吹いて、入口からドタドタ、ダラダラ入って来る十五人の男たちに）はい、男性は、女性のこちら側に一列横隊で整列して下さい、早く早く、（先頭を来た陽平の腕をとり）はい、あなた、ここへ来てェ（とすでに並んでいる五人の女性の横へ立たせ）はい、男性はここから、こっちへ並んで下さい。ダラダラしないで。右へならえ、右へならえッ（更に指

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

示)」

後藤と田中、後方から十五人とはちがう胸をはった姿勢で、列の前面へ回りこんで来る。

後藤「気を付けェッ！(といきなり怒鳴る。怒鳴りながら、列と相対する位置まで来て、正面を向く)」

沢「気を付けです。気を付けッ！」

一同、まあまあ、それらしく立つ。しかし、顎があがりすぎていたり、背が丸くなっていたりして、さまにならない。

後藤「命令に従う自信のない人は申し出て下さい。ガードマンという仕事は、命令による統制がとれなければ成りたたない仕事であります。命令を聞けない人は、申し出て下さいッ」

田中「いませんか？(どこかのんびりしている)」

後藤「では、全員、私の命令に従う意志があるものと認めます。これから、一週間の研修に入ります。研修中、不適当なことがない限り、一週間後、諸君は正式に警備士として採用されることになります。頑張っていただきたい。休め。気を付けェッ！」

田中「では、研修用の制服を支給します(と背後の長椅子に積まれている服へ行く)」

ある高層ビルの階段・36階(夜)

屋上へのドアへ手をかける若い女。鍵がかかっていて、あかない。ガチャガチャやる。しかし、あかない。疲れたやりきれない顔でのぼって来た階段を振り返る。

体育館・ロッカールーム(昼)

制服に着替えている十五人の男。

ドアの近くに、人間ひとりの全身をうつす程度の鏡があり、竜夫、制服で立ち、戦闘帽スタイルの帽子をかぶる。と、押しのけられる。おしのけたのは陽平である。

陽平「(押しのけたことなどまったく気にせず鏡の中の自分を見て)おうおう、ひでえことになっちゃったねえ。丸腰かよ、丸腰。なんかなきゃ格好つかねえな、おう(と押しのけられる)」

竜夫(自分をうつして、胸のあたりをゴミでも払うように叩く)

陽平「やるじゃねえの、にいちゃん」

竜夫「あんたが先にやったんだ」

陽平（いきなり竜夫の胸ぐらを摑み、壁に押しつける）
竜夫（すぐ、その腕を摑んで首からはなす）
陽平（すかさず一方の手で首を攻めようとする）
竜夫（その手も摑んで、ひきはなそうとする）
田中「（顔をドアから出す）はい。着替えた人からドンドン体育館へ戻って下さい。（陽平と竜夫を見て）なにしてんだ？」
二人、はなすにはなせず、力が均衡をとって、動かない。
田中「まさか、喧嘩してんじゃないだろうね」
二人、口をきく余裕がない。
田中「もし喧嘩ならやめた方がいい（とのんびりしてなにか可笑しい）うちの会社は人間関係ってものを重くみるからねえ。研修の初日に喧嘩するようなのは採用しないよう（と行こうとする）」
陽平「おっさん」
田中「なんだ？」
陽平「ネクタイ（と手をふりおろし）なあ（と竜夫に笑い）ネクタイ直し合ってたんだよな」
竜夫「ああ（田中へフフと笑い）ネクタイです（と陽平のネクタイをしめ上げる）」
陽平「ヒッ！」

高層ビルの壁面（夜）
普通ガラス窓は開閉できないので、何処か外へ出られる盲点のようなものをさがしたい。
若い女、外側へ出て来る。風が強い。
すくむように下を見る女。

研修の教室（夜）
黒板に「忍耐」と書いてある。
後藤「（講義をしている）くりかえすが、警備は、なによりも予防でなければならない。犯人を逮捕したり、火事になってから消したというのでは、決して最高の警備とは言えない。犯罪や火災が起こる前にくいとめることこそ、警備の真髄と言わなければならない。それには、一にも忍耐、二にも忍耐」

高層ビルの下（夜）
飛び降りて死んだ女の写真をとっている鑑識。救急車。パトカーの赤いランプ。野次馬。

グラウンド（朝）

制服の十五人と五人が体操をしている。

イチニ、サンシ、イチニ、サンシ。それを端に立って見ている男、背広姿の吉岡晋太郎である。

後藤「（近づいて来て）お早うございます（と敬礼）」
吉岡「お早う（と軽く敬礼を返す）」
後藤「こんな早くから、なにか？」
吉岡「うむ――（と少し正面に向かって歩き）柴田君ていうのは、どの子だい？」
後藤「なにかありましたか？」
吉岡「いや、どの子だい？」
後藤「二列目の右から二人目ですが」
吉岡（見る）
後藤「身元調査でなにか？」
吉岡「いや、そうじゃない」
竜夫（体操をしている）
吉岡「――（ゆっくり目を伏せる）」
後藤「わりあい、真面目にやっておりますが」
吉岡「そう――お邪魔した（と道の方へ）」
後藤「お知り合いですか？（と少し追って小さく聞く）」
吉岡「いや――なんでもないんだ（と行く）」

あるビルの電話交換室（昼）

島津悦子、数人の同僚と席を並べて、素早いが、無表情な顔で、機械的に仕事をしている。

柔道場（夜）

闇である。犬が遠く吠える声。

引き戸がそっとあけられる。廊下の弱い灯りが漏れる。運動靴の足が、そっと中へ入る。そして戸を閉める。パチンとペンライトをつける。そして壁面を照らす。

ロッカーがある。書類がある。事務机と椅子がある。ついたてがあり、金庫がある。柔道場とは思えない。

金庫をさがしあてた影。その前へ行き、ダイヤルを回しはじめる。背後で、パチンと懐中電灯の大型の灯りがつき「誰だ！」と青年Aの声。パッと影は横っとびについたての陰へかくれる。

と同時に「動くな」という青年Bの声と懐中電灯。「出て来い、この野郎！」と言う陽平の声と懐中電灯。

後藤「はい。その位置のまま」

部屋の灯りがつく。

柔道場の一方の壁面に事務所の調度がセットされ、反対側の壁面に研修生と沢らが腰をおろしている。灯りがついたところで、一同、ホッとしたように笑い声をたてる。

後藤「まず犯人像からいこう。えー、いまつい立ての陰へかくれた犯人は、どんな人物か（坐っている一人を指し）まず、性別」

青年E「男」

後藤「（別の一人を指し）年齢はどのくらい？」

女性A「わりと敏捷だったから、二十代の――前半」

後藤「（別の一人に）肥っていたか、やせていたか？」

青年D「がっしりしてた」

後藤「素早く人物の特徴をつかむこともガードマンの重要な役割の一つだ。（つい立ての陰に向かい）聖ちゃん、ご苦労さん」

浜宮聖子（黒いレインハットに黒いレインコート、黒のスラックスに、黄色のブラウスで、美しい。出て来て、一礼）

一同、拍手。ウオー、などと感嘆の声。

後藤「浜宮警備士だ。みんな、もっと鋭い目を持ってもらいたいッ」

聖子「よろしく」

「よろしく」「よろしく」などと元気のいい声が一同から出る中を、聖子、一同の端へ歩いて行く。

後藤「（中央にいて）えー、注目。注目ッ」

一同、漸く見る。

後藤「まず一人一人の位置から行こう（と一番つい立てに近い陽平に近づき）この位置がもっともいけない。近すぎる。相手がどんな人間か、どんな兇器を持っているかもわからずに、ここまで近づき、しかも追いつめた形になっている。非常に危険だ。（陽平に）犯人になんて言った？」

陽平「出て来い、この野郎（一同、笑う）」

竜夫（も笑っている）

柔道場前の廊下

その竜夫をガラス越しに見ている制服の吉岡。

柔道場

後藤「警備士は、この野郎などと言ってはいかん。警備士

らしい、品位と威厳をもった言葉づかいをしてもらいたい」
陽平「なんて言やぁいいですか？」
後藤「（坐っている一同に）なんて言ったらいいと思う？君（と青年Cを指す）」
青年C「はあ、えー（と立ち上がる）」

廊　下

吉岡「――（中を見ている）」

柔道場

青年C「（大声で）お前は包囲されている。銃を捨てて出て来いッ！」
一同、笑う。
陽平「（すかさずハンドマイクを持った感じで）お母さんが泣いているぞ、お前のお母さんが泣いているぞ」
一同、笑う。
後藤「君たちは、プロになる研修を受けているんだぞッ！静かに、静かに」
ガラッと戸があく。吉岡である。
後藤「あ、ご苦労さまです（と敬礼する）」
吉岡（うなずいて、戸を閉める）
後藤「えー、紹介しよう。吉岡司令補だ」
吉岡「（一同を見て）今晩は」
一同、気圧されて「今晩は」と口々に言う。
吉岡「（後藤に）ちょっと割り込ませてくれ」
後藤「はあ。それはいいのですが（と中央に来る吉岡に押されるように後ずさりし）あの」
吉岡「なんだい？」
後藤「いえ、前例がございますので心配と言ってはなんですが」
吉岡「大丈夫だ（と一同を見る）」
後藤「えー（と慌てて一同へ）吉岡司令補は研修には直接関係されていないのであるが、君たちに大変期待をされて、今朝も早くから君たちの研修ぶりを見に来られていた。有益なお話をいただけると思う。ご静聴いただきたい（一礼して二、三歩さがる）」
吉岡「（一同へ）私は、話をしに来たのではない。耳で聞いたことはすぐ忘れる。身体で覚えた方がいい」
後藤「しかし、あの（と遠慮がちに言う）」
吉岡「（無視して）いま、この後藤さんが、犯人に近づきすぎるのは危険だと言った。その通りだ。しかし、そ

ういうことを聞いていても、必ず何人かが、犯人を追いつめ、自分で捕まえようとする。そして、怪我をする。殺される。自分の弱さを知らないからだ。君たちの力を教えてやろう」

後藤「(困って)しかしですね、吉岡さん」

吉岡「(立っている三人に)この三人と(一同の中から)君と君と(青年C、青年D、最後に竜夫を指し)君だ」

竜夫「――(吉岡を見ている)」

吉岡「出て来て、私を囲め」

竜夫、青年CD、立つ。

後藤(弱ったなあという顔で沢を見る)

沢　(ほんとうに、と言うようにうなずく)

吉岡「私を、六人で逮捕するんだ」

陽平「手加減なしですか?」

吉岡「勿論だ。そのかわり、私も手加減はしない。早く、私を囲め」

陽平「こう自信たっぷりだと、おっかないねえ」

青年C「やろうじゃないの」

青年D「やりましょう(と語尾が上がる)」

陽平「おおっと(と他の五人に)一人で行くなよ。一緒だぞ」

竜夫「君と君、足にタックルしろ、俺とあんたは正面だ。あとの二人は後ろへ回れ」

陽平「ホウ、大将がいるぞ、大将が」

竜夫「黙って回れ」

陽平「いいでしょいいでしょ。イチニッサン、イチニッサン、イチニッサン。俺のかけ声で行くぞ」

竜夫「OK」

青年C「OK」

陽平「やっちまえッ!」

六人、吉岡にとびこんで行く。

後藤(思わず目を閉じる)

あっという間に、六人ともふっとばされている。股を蹴上げられたの、アッパーカットをくらったの、腹を殴られたの、腕をねじ上げられたの、背負い投げでやられたの。

メリハリのあるテンポで、納得させ得る倒し方で倒す。

吉岡「(乱れた髪のまま)いいか、君たちは弱いんだ。それを忘れるな(と不似合いなほどの激情を押さえてドアの方へ)」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook